

一 般 演 題 抄 錄

7. 慢性骨髄性白血病症例の臨床的検討

杉山昌史 佐野徹明 炭本至康 内木義人 永木寛之 橋本圭二
東芝昌樹 前田裕弘 椿和央 入交清博 堀内篤

近畿大学医学部第3内科学教室

我々は、昭和50年5月から、平成7年12月までに、近畿大学医学部第三内科を受診した慢性骨髄性白血病患者のうち、初診時未治療でありかつ経過の明らかなもの50例について検討した。病期分類では、慢性期45人、移行期1人、急性転化していたもの5人であった。年齢の中央値は42.5歳であり、男性34人、女性16人と男性に多く認められた。初診時自覚症状は50人中15人は無症状であり、症状を認めたものうち最も多かったものは易疲労感の15例、腹痛は7例、体重減少は3例であった。無症状の者の多くは健康診断で白血球増多を指摘されたものであった。慢性期と診断されたものうちその患者について最も主な治療と思われたものについて統計した。ブラスファンのみ投与されたものが最も多く21例、インターフェロンのみ投与されたものが10例であり、インターフェロンとハイドロキシウレアを投与されたものが4例、その他は3剤の併用投与の組合わせであった。BMTを行ったものは7例であった。

BMTについても統計したが、移行期の1例と急

性期の1例は移植直後に死亡、慢性期の5例のうち2例も同様であった。しかし、3例は長期生存中で、その平均生存期間は60カ月であった。症例全体の5年生存率は30.2パーセント、もっとも長く生存したものは203カ月で、初診時35歳の男性であった。

症例全体と、インターフェロンを投与した群との生存期間を比較したが、有意差は認められなかった。インターフェロンはCMLにおいてPh1クローンを減少させるといわれているがインターフェロンが比較的最近の治療であり、観察期間が異なるためと思われる。BMT施行群と非施行群についても生存率を統計したが、明らかに施行群において生存率が良好であった。白血球数が10万を越えたものとそうでないものについて急性転化するまでの期間を比較したが有意差は認められなかった。

転帰については、急性転化したもの、急性期にあったものは全例が死亡した。死因のうち、多かったものは化学療法時の感染症であった。

8. 子宮頸部小細胞癌の臨床病理学的検討

永井 堅 池田正典 星合 昊 野田起一郎

近畿大学医学部産科婦人科学教室

目 的

子宮頸部小細胞非角化型癌(以下小細胞癌)は、従来より他の扁平上皮癌に比べ、予後不良と考えられている。しかし、この小細胞癌の病態について詳細な検討を加えられた報告は、過去には多くありません。今回我々は、種々の臨床病理学的検討を行ない、小細胞癌の生物学的特性の解明を試みた。

方 法

対象は、当科で初期治療を行なった、子宮頸部扁平上皮癌102例、そのうち小細胞癌83例、大細胞癌19例、また、子宮頸部腺癌11例を用いた。小細胞癌83例中、38例は病理組織学的に90%以上の部分が純粋に小細胞癌の性格をもつもので占められていた。

神経内分泌関連物質として、クロモグラニン、ソマトスタチン、セロトニン、NSE、また、CEA、Vimentinの各種モノクローナル抗体を用い、ABC法による染色を行なった。また、PCNA標識率を用

いた、癌組織増殖相割合の検討も加えた。

結 果

神経内分泌関連物質のうち、NSEはその陽性率が、大細胞癌15.8%、頸部腺癌27.3%と比べ、小細胞癌で75.9%と有意に高い値を示した。特に、純粋な小細胞癌では、92%と高率に染色された。また、小細胞癌NSE陽性例は、NSE陰性例に比べ、リンパ節転移、傍結合織浸潤が、高頻度に認められる傾向にあった。

PCNA標識率による癌組織増殖相割合は、NSE陽性例で高い値を示した。

結 論

小細胞癌は、大細胞癌、腺癌とは違った生物学的性格を有しており、特に、純粋な小細胞癌で、その傾向が強く、このことが、小細胞癌の予後の不良さを招来しているのではないかと示唆された。